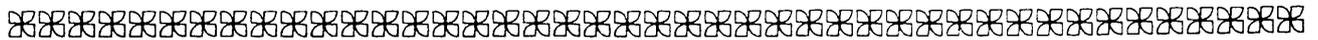


臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報

平成9年度(第40回)支部大会号





第40回 東京支部大会プログラム

平成8年6月7日(土) 午後2時

於 浅草ROXニューオータニ

◎準備

場内指令(段取・渉外)	伊藤 勇五、篠川 恒夫、大橋 貞夫
案内(総合)	沢出 赳允、小林 早月、深見 洋子
受付(総合・来賓)	関 孝世、八木又一郎、岡本 和子
(旧中・旧女)	芳賀 健一、鈴木 節子、佐藤 玲子
(高校 男子)	近藤 燦子
(高校 女子)	青木 猛、松田 茂夫、石黒 四郎
(景品受付及び会報等配布)	笠原 静夫
	山西愈佐子、木村 孝子、中島 和子
	渡辺 八郎、山下由紀子、渡辺 厚子
会場設営	鈴木多喜男、広田 達衛、佐久間英輔
	田代 信雄
司会	斉藤 和男、真水 道子、小島 典子

◎第一部

開会宣言	武藤 三郎
平成8年度経過及び会計報告	鶴巻 浩
会計監査報告	芳賀 健一
支部長挨拶	佐伯 益一
来賓紹介	伊藤 勇五
同窓会長挨拶	茂野 敏郎
校長挨拶	吉川 益男

◎第二部

懇親会	
合唱	「旧校歌=塵の巷を遠ざけて」 関 孝世
乾杯	出席高齢者の中から
特別出演 おどり「浅草・振袖さん」	(株)浅草観光振袖学院
ビンゴゲーム(佐伯賞)	沢出 赳允、八木又一郎
抽選会	篠川 恒夫、大橋 貞夫、徳永 道子
	渡辺 厚子、中島 和子、近藤 燦子
校歌・応援歌ほか	全 員
手締め	支部長
万歳三唱	校 長
閉会挨拶	鈴木多喜男

(表紙について)

—愛宕神社—

撮影 八木 年秋氏(大正8年生まれ・五泉市在住) 県展無鑑査、二科会写真部新潟支部長代理
 五泉市文化協会副会長、県展及び二科会展で受賞・入賞数回に及ぶ。平成2年10月、写真集「阿
 賀野川を彩る」を出版。会報N019表紙「田植え風景」、N022表紙「白山と白鳥」も氏の作品です。
 (愛宕神社については、12ページをご参照下さい)



支部大会40回の重み



東京支部長 佐伯 益一 (旧中27回卒)

松高同窓会東京支部大会は本年をもって第40回目を迎える。ひと言で40回というが、ここまで続けることは決してなまじしいことではなく、先人たちの労苦の積み重ねによるものだということを先ず申しあげておきたい。

同窓会東京支部の創設期は定かではないが、遡って指を折れば第1回は昭和32年ということになる。しかし毎年開催されたわけではなかろうし、終戦直後の混乱期は同窓会どころではなかったことも考えあわせてゆくとやはり 平和条約発効後の昭和28、9年頃なのではないかと推察される。

昭和22年に在京有志が非公式ながら集会したとの記憶もあるが当時はまだ同窓会の形は成していなかったようである。(これは同窓会の生き字引と言われた旧中16回卒の故山村 勲氏のご意見による)

今ここに 当時の 同窓会案内の資料がある。

昭和49年6月7日午後6時 銀座松坂屋地階「オアシス」で第17回東京同窓会開催のハガキである。支部長は大正15年第11回卒の 水尾 正二氏で 会費は男子3千円、女子2千円、学生千円で司会は村松出身の落語家林家さん吉、新潟市出身のキングレコード専属歌手竹久あつ子の特別出演 抽選会等が計画されていて中々に微笑ましい。翌50年の第18回は会場が変わって市ヶ谷の自動車会館内の「加茂」となる。支部長や会費は前年と同じだが案内状幹事の中に私の名前が入っている。開催年度と開催回数が記されているのは、この2枚だけで、これが今回の第40回大会の根拠である。

以後はしばらく「加茂」が使われるが、この頃から旧女学校や高校の女性同窓会員の出席が多くなってくるのである。

これより前 昭和37年11月8日午後5時半から日本橋本町の葉葉會館地下「ロンドール」で同窓会が開催されている。会費は千円で女性及び学生は500円である。

支部長は大正6年第2回卒の 近藤 潮氏でハガキヘガリ版刷りの案内状、当時のハガキ代が5円というのも懐かしい。47年には5月12日午後6時から銀座の「日航ホテル、スカイルーム」で男子2千5百円女子2千円、学生千円の会費、支部長は11回卒の齊藤 一男氏で副支部長に 見方 謙策(中18回) 安中 盛介(中22回) 亀嶋 謙(中22回) 3氏の名があり 他に相談役として5氏の名が連記されている手書きで青焼きの案内状である。声帯模写の 桜井長一郎氏が出演している。この頃 広く学生に参加を呼びかけているのも珍しく、吾々にとっても今後の課題となろう。

ちなみに 歴代支部長は前述の山村氏の計算によれば私でもって第9人目であり、昭和58年6月の支部大会で見方支部長のあとを継いから今年で14年になる。よく続けて来たものと感無量であり これも役員初め会員各位のご支援のお陰と感謝している。

最近の支部の動きについては会報その他などで よく御存じのことと思うので ここではふれぬが 何れともあれ 40回という支部の歴史を土台として今日があるのである。40回は一つの節目である。人に例えて言うならば“不惑の歳” 惑うことなく この大会を契機として 新たな21世紀へ飛躍することを大いに期待したい。

常に言っていることだが“出来るだけ多くの人と知り合いになれ、友達を作れ”というのが私の信条である。処世の指針として役立てば幸いである。

最後になったが 同窓各位の益々のご健在とご活躍を祈り 総ての皆さまに感謝して ご挨拶にかえたい。

(この稿をおこすにあたり 中33回卒 芳賀健一氏の秘蔵する過去の同窓会案内状を参考にさせて頂いた。

厚く御礼申し上げます。尚 この件については 会報第6号、平成元年新春号で同氏寄稿の形で取りあげているので参照されたい)

ちょっと良い話

会議のあと 会費持ち寄りでささやかな酒宴が時々開催されます。佐伯支部長はそのつど必ず大声で『注がれた酒やビールは全部飲み、残すな、無理に注ぐな、半分は税金だ、消費税も入っている。(飲みたくても) 飲めなかった時のことを考えろ、片づける人の迷惑もだ』と言うのです。なるほど ごもつともとは思ってはいるんですが……

ちょっと良い話

鹿瀬町主催の「奥阿賀かのせ写真展」を見に行きました。沢山の人出で中々の盛況でした。越後の山奥の小さな町が花のお江戸でこんな立派な催しを開くなんてと只々驚きの連続でした。町の人達の熱意とこれを応援する東京鹿瀬会の皆さんの郷土愛に感激しました。そして 若い外人のカップルが五平餅を食べながら見ていたのがとても印象的でした。



生徒数の減少に思う



村松高校・校長 吉川 益男

世は將に改革の流れが渦巻いている。行政改革、規制緩和、金融機関の統廃合等大きな流れが音を立てているが、教育界においても同じである。第15期中央教育審議会において種々議論されているが、結論を待たずして高校は大きく変化している。少子化の時代を迎えて生徒数の減少は驚くほど急速に進んでおり、この影響は大きい。本校の本年度の新入生は、定員240名のところ4名減の、236名であった。ここ数年定員割れしていなかったが、村松・五泉地区の生徒数の減少は甚だしく、地元の中学校でみると山王中学では1年生120名（男子64名・女子56名）、2年生147名（男子83名・女子64名）、3年生131名（男子63名・女子68名）合計398名、愛宕中学校では1年生147名（男子71名・女子76名）、2年生177名（男子95名・女子82名）、3年生129名（男子67名・女子62名）合計453名である。先輩諸氏の在学当時の状況と比べて、生徒数の減少にはびっくりされたことと思います。

新潟県では、本年度から普通科にも推薦入学制度を導入しました。本校では定員240名に対して、15パーセントの36名を推薦で入れることにしたところ、本年度は36名の推薦枠に対して80名の応募がありました。しかし、一般選抜検査には定員に対して3名減の応募で実際に合格した生徒は推薦を合わせて234名でした。二次募集の結果2名の応募があり、学力検査の結果この2名が合格し、結果的には定員240名のところ4名減の236名が入学しました。本校の在席生徒数の推移をみると、平成7年度722名、平成8年度714名、平成9年度695名と年々減少しており、このことは生徒会費PTA会費等の会費収入にも大きく影響してまいります。これは最近の物価高や消費税5パーセントに伴う支出増と相俟って、生徒のクラブ活動に少しづつ響いてくるものと考えます。新津・五泉地区（この地区には県立高校7校、私立高校は無）の生徒数の推移は、平成9年度1918名ですが、5年後の平成14年には1749名、8年後の平成17年には1516名となります。このことは、やがて本校にも学級減があることを示しておりますが、創立90周年を迎える平成13年まではなんとか現状を維持したいものと願っています。

本校の状況を申し上げますと、進学は平成8年度はやや低調でありました。4年制の大学4名（平成7年度9名）短期大学11名（同15名）高等看護学校4名（同4名）テクノスクール・専門学校74名（同55名）という思いもかけぬ結果にで大いに反省しております。

しかし、本年度は進学体制が更に強化されましたので、一昨年以上の成果が期待されます。就職では、この不況のなか学校斡旋の生徒は100パーセント就職しました。内訳は県内105名、県外5名の合計110名でした。伝統校の強みを生かして、先輩諸氏から応援を頂いた結果であると有り難く思っております。

クラブ活動では、運動部で県大会優勝といった部はありませんでしたが、陸上・剣道・野球が県大会に駒を進めております。

文化部ではカメラ部・書道部・美術部が顕著な活躍をし、特にカメラ部は県総合3位という活躍でありました。この春の異動で若い先生が多く赴任されましたので、運動部の伸びを期待しております。

さて、少子化についていさ少し触れてみると、本年度の村松町における小学校1年生の数は、4月4日現在で178名（村松東小42名、大蒲原小27名、十全小15名、村松小75名、川内小19名）である。

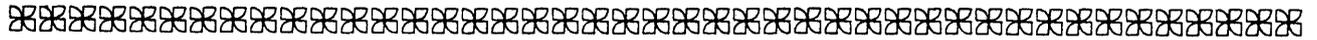
「広報むらまつ」の4月号によれば、町の人口が21542人（5830世帯）ですから、小学校1年生の占める割合は約0.83パーセントと1パーセントに満たない。驚くべき数値であります。この傾向が続けば近い将来、小学校の統廃合がなされることは必至であります。

私たちの子供の頃はどこの家でも兄弟が沢山おりました。私も5人兄弟でした。近頃は、子供は一人か二人という家庭が普通になってしまいました。ここに教育の大きな問題点があるように思います。大勢の兄弟の中で育つことによって、我慢することや小さい子をいたわる心が養われたように思います。また、兄弟が大勢いることから親から細かいことまで見てもらえず、自分で結構なんでもやってきたように思いますがいかがでしょうか。

いじめや自立心のない子供が多くなった原因の一つが少子化によるものと考えます。国が栄える基は人であり、このままの状態が続くとわが国は力を失い、アジアの小国になってしまいはせぬかと心配しております。

この歳になると、最近はいくつか仲人を頼まれます。勿論、いわゆる頼まれ仲人ですが、そのスピーチの折には決まって種々少子化のデメリットに触れて、その最後に必ず次のように述べることにしています。

「……………、したがって、若いお二人には、二人の愛の証として、次代のわが国を背負うお子様を、少なくとも三人は生み育てて頂きたいと思っております。そうしませんと私たち先生の商売が、あがりたりになってしまいはせぬかと心配だからであります。……………」



経済的な理由によるものなのか、親のエゴによるものかは分かりませんが、この風潮をどこかで断ち切らなくてはならないと思っております。
同窓会誌の原稿として甚だ不適切な文を寄稿してしま

いましたが、意のあるところをお察し頂けたら幸いです。

村松高等学校同窓会東京支部のご繁栄と、同窓の皆様
の益々のご発展を心から念じております。

平成8年度 東京支部の動き

平成8年

4月 13日	会報 N021	編集会議	事務局	5名
	#	常任幹事会	大会通知発送	// 10名
	#	幹事会	大会役割説明会	ROX 23名
17日	印刷所	会報 N021	原稿渡し	
5月 8日		#	一次校正	
9日	印刷所	#	渡し	
15日		#	二次校正	
16日	印刷所	#	渡し	
18日	常任幹事会	ROXと大会打合せ		6名
23日	朝日新聞	マリウに大会予告掲載		
29日	会報 N021	印刷上り		
6月 1日	第39回	東京支部大会	ROX	103名
8日	常任幹事会	会報 N021	発送準備	9名
16日	禪齋	中村倉吉氏 一周忌	陽寿院	6名
22日	常任幹事会	会報 N021	発送	210通 7名
7月 6日	幹事会	大会反省会	ROX	17名
8月 17日	同窓会本部総会	新滝	支部より	3名
9月 14日	会報 N022	編集会議	事務局	5名
10月 12日	#	#	#	5名
19日	会報資料収集	お台場		4名
11月 1日	支部事務局	湯島へ移転		
2日	会報 N022	編集会議	事務局	5名
11日	轉	堀 哲二氏 通夜	支部より献花	
			北春日部会館	8名
30日	会報 N022	編集会議	事務局	5名
12月 2日	印刷所	会報 N022	原稿渡し	
6日		会報 N022	一次校正	
7日	印刷所	#	渡し	
11日		#	二次校正	
12日	印刷所	#	渡し	
17日	会報 N022	印刷上り		
21日	常任幹事会	会報 N022	発送	310通 8名
	#	幹事会	総務 望年会	ROX 24名
平成9年				
2月 8日	会報 N023	編集方針	ビックセンター	10名
	#	常任幹事会	運営方針と新年会	// 10名
3月 1日	会報 N023	編集会議	事務局	4名
29日	#	#	#	4名

ありがとうございました

① 平成8年度会費納入の皆さん(その二)

松尾真一郎・吉田 公男・宮 健三・小池 生夫
小野里康興・高岡 雄三・安中 啓作・寺山 和夫
堀川 俊郎・原 ヤス子・小林 満子・寺山 征子
坂爪 圭子・大橋 玉枝 (以上 14名 敬称略)

平成8年度 延べ計

男子 186名 女子 85名 合計 271名

合計金額 812,000円 (内1名 2,000円 納入)

② 平成8年度寄付金納入の皆さん(その二)

1,000円 土田 式蔵
2,000円 吉田 公男・寺山 和夫・堀川 俊郎
寺山 征子
3,000円 大橋 玉枝
5,000円 渡辺 好雄
10,000円 大江 雅敏
100,000円 堀 和子
(以上 6名 敬称略 計 127,000円)

平成8年度 延べ計

男子 52名 女子 23名 合計金額 420,000円

ちょっと良い話

佐伯支部長はいつも電車の回数券を沢山もっていて
会合の帰りなどで各自に一枚づつ渡してくれます。
『足りなかったら自分で払え、余ったら釣銭貰え』
と駅員がビックリする様な大きな声で言うのです。
そして私達は何のためらいもなく切符を受け取っ
てしまいます。回数券でおつりが貰えるのだろうか？



平成8年度収支決算書（案）

平成8年4月1日より平成9年3月31日まで 新潟県立村松高校同窓会東京支部

収入の部			支出の部		
項目		金額	項目		金額
年会費		812,000	支部大会費		874,343
男子	186名 557,000	(内1名2,000)	NO22発表	863,261	
女子	85名 255,000		追加分	11,082	
寄付金		420,000	会議費		146,938
男子	延52名 256,000		通信費送料		127,910
女子	延23名 164,000		通信費	8,360	
大会会費		1,014,000	会報送料	119,550	
男子	70名 700,000	(NO22発表)	会費払込手数料		11,780
女子	33名 264,000		印刷費		276,011
祝儀	50,000		NO21 税込	116,184	
			NO22 "	132,458	
			封筒 "	25,750	
			振込料	669	
			コピー代	950	
			本部総会祝儀		20,000
			弔慰金(2件)		43,880
			記念品代		11,000
			備品費(ゴム印)		8,703
			交通費		12,000
			雑費		44,093
小計		2,246,000	小計		1,576,658
7年度より繰越金		472,450	次年度繰越金		1,141,792
郵便貯金	449,630		郵便貯金	988,144	
現金	22,820		支部長手持現金	129,403	
			事務局長 "	24,245	
小計		472,450	小計		1,141,792
合計		2,718,450	合計		2,718,450

上記の通り報告いたします。

平成9年4月5日

支部長 佐伯 益一 印
事務局 鶴巻 浩 印
経 理 岡本 和子 印

上記の収支決算書は監査の結果、適正であることを認めます。

平成9年4月12日

監 事 芳賀 健一 印
監 事 塚田 勝 印

お便りの中から

大関 慶子 (高 6回) 村松町在住

◎会報をいただき本当にありがとうございました。
東京支部のご活躍に感謝いたしております。
会報の中で知っている方々のお名前を拝見し、なつかしく思っております。
新井康夫さん、覚えておいででしょうか。放課後講堂で卓球のご指導を受け一緒にいろいろな大会に参加したことなど鮮明に思い出しました。私は四年前からラケットは握っておりませんが、それまでは何とか楽しんでおりました。東京支部の皆様、お元気ですますのご活躍をお祈り申し上げます。

村田 英士 (旧中30回) 村松町在住

◎「臥龍が丘は緑なり」をお送り下さいましてありがとうございました。厚く御礼申し上げます。
東京支部の皆様にとりましては、松高は永遠の心の源流なのですね。会報を読みますとこれがひしひしとわかります。表紙の白山を見る気持ちがわかります。
こちらもただ今「松城」の編集に取り組んでおります。年をとるにつれて「緑濃き臥龍が丘」は鮮明に蘇ってまいります。皆様によろしく。(松高同窓会・会報「松城」編集長…… 顧問村田医院理事長)

大江 雅敏 (旧中27回) 亀田町在住

◎東京支部会報「臥龍が丘は緑なり」N022拝受、感謝の念この上なし。(中略)小生の腰痛は相変わらず、歩くよりも自転車を愛用して走らせるのが良いのか、悪くないと思うが一年一年日を重ねると身も体もそれなりに変化して来ている。先日、愛車を走らせて新潟駅近くまで行き用件を済ませたが、疲れも殆んど感じない位であったので、まだまだ見捨てたものではと思っている次第。
松高同窓会、亀田・横越地区の会合が二月二十二日当地で開催された。今回で五回目である。余興が出る暇もなくもっぱら話し込むばかりであった。頭数二十余名、地区の会員数は一五〇名。
東京支部には色々とお世話になりっぱなし僅少ですが一万円同封、支部の運営費の一部としてお収め下さい。体調に合わせて行動をとられるように。

渡辺 好雄 (旧中27回) 村松町在住

◎会報送付ありがとうございます。記事を見ていろいろの事をなつかしく思い出しております。

少年通信兵の碑については、よく詳細に調べられたものだと感銘を受け熟読しました。実は、あの頃は高農と兵役で村松に不在でシベリヤから復員後、通信兵の存在を知った次第。又、沢出さんの村松町安養寺開山 550回忌式典の記事についても、私も出席していたので特に興味深々でした。村松人さえよく知らない村松の記事が盛りたくさんなのに敬意を表する次第。会報送付の一助にもと僅少ですが五千円同封しました。お収め下さい。

土田 式蔵 (旧中27回) 村松町在住

◎会報や写真ありがとうございます、送料として千円同封した。ご活躍を祈る。

ちょっと良い話

1996年(平成8年)12月4日

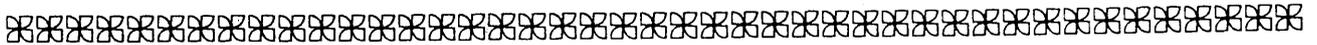


先づ合格者が発表された本年度第一回の気象予報士試験で、新潟県新潟市の元高校教師、相田吉之助さんが合格率五・三%の難関を乗り越え、合格した。試験を管理する財団法人気象業務支援センターによると、これまで全国で気象予報士に合格した千七百九十三人のうち七十歳以上はわずか九人。そのほとんどは気象庁や日本気象協会のOBで、「気象業務の経歴のない人がこの年齢で合格するのは珍しい」と話している。一昨年から始まった気象予

70歳元教師が気象予報士

報士試験は今回で通算六回目を。相田さんは昨年八月に学術試験に合格した。今年一月に最終関門の実技試験(天気図をもとにした記述試験)に挑んだが不合格。学科試験合格の有効期限一年を生きすラストチャンスとなった今回、実技試験を見事に突破した。五十五年前の旧制村松中学校時代、相田さんは予報官を志していた。気象技術官養成所への進学をのぞんだが、父親の反対で泣く泣く教職の道を選んだ。西新発田高校を最後で退職した後、気象予報士が創設された。「人生最後の思い出に、少年の日の夢をかなえたい」と家族に相談。昨春

相田 吉之助氏 (中29回)



同期会

赤山会春季例会

武藤 三郎 (旧中26回)

平成九年春季・赤山会は 3月29日(土)午後 1時から市ヶ谷・私学会館(アルカディア市ヶ谷) 5階、赤城の間で24名の出席をえて開催された。

一、二年前から会長、事務局長などの幹事交代について検討されていたが、昨秋から大先輩の小田恕哉氏(旧中16回)がその選考委員会の議長に就かれ、経過を発表された。それによると吉田正平氏(旧中25回)が新会長就任を快諾されたものの、事務局長の後任で結論が得られず残念な思いをしている。従ってやむを得ない措置として、佐久間事務局長に暫定的に留任していただき、赤山会の運営に支障を来さないようお願いした。体調が万全でないにもかかわらず、長年にわたり献身的な情熱を傾けていただき申し訳けなく思い心から感謝している。出来るだけ早く後任が決まるよう努力したいので皆さんの理解あるご協力を賜りたいとの要旨であった。

秋季例会が、11月24日に予定されているが、それまでに新執行部のスタッフが誕生するものと期待している。

懇親会は終始和やかに、民謡や詩吟・カラオケなどで盛り上がり、予定時間も瞬く間に過ぎ旧校歌を高らかに歌って閉会になった。

「赤山會」会長辞任挨拶

亀嶋 謙

いまから丁度10年前、昭和62年(1987年)いろいろな経緯はあったが、旧制村松中卒の東京在住有志OBで結成していた「赤山会」を、独立した会として発足することになり、私がおの会長に就任することになった。

その時の私達の気持ちの中には、旧制中学には独特の雰囲気があり「あの雰囲気を知っている」「分かっている」という人達だけの会を持ちたいとの願いであった。

そして、あの頃の気分を思い切り懐かしんだり、楽しんでくひと時を味う会>ただそれだけの気持で発足したのである。

以来満10年、毎年春と秋の2回開催してきたが、よく続き、お陰でよき時代の古き校風や思い出を満喫することが出来た。

私個人としては、自分の人生の追憶のなかで、会長職という貴重な経験をさせて戴いたと思っている。これみな、会員の皆さまのご協力、また母校愛の賜物であると感謝している。この会の事務局長を心よくお引受けいただき、若輩の私を支えて下さった私より2年先輩の佐久間精一氏には、陰でのご尽力に対し、ここに改めて厚くお礼申上げる次第である。

後任は吉田正平氏に決まり、先は見えていると言えども赤山会は、まだまだこの先、十幾年は続くので、皆さまにはこれまでと同様に、新しい吉田会長にご支援、ご協力の程をお願い致したい。

皆さま、長い間ありがとうございました。

平成9年3月29日

東京市ヶ谷「私学会館」にて



新会長 吉田 正平氏と亀嶋前会長
(旧中25回) (旧中22回)

松城終始会

平成 8年11月 9日、越後湯沢温泉の「ホテル双葉」で松城終始会（旧中33回及び新制高校 1回卒）が開催された。今回の大会は東京地区の主催で行われ参加者52名にも及ぶ近來稀な盛況ぶりであった。先ず相田忠亮君の司会で会は始まり、三つのクラス 170余名の卒業生の約二割、32名の物故者のため黙祷を捧げた後、東京地区幹事代表・加藤三代太君の大略次の様な歓迎の挨拶があった。「歳月の経つのは早いもので学窓を出てから既に48年、將に65才を過ぎ、少なからぬ同輩を鬼籍に送ったが我々も又、人生の第二のスタート台に立つ身となった。そして今の想いは…あと何年ぐらいこの美しい日本の春の桜や、秋の紅葉の時期を迎える事が出来るであろうか…などと詠嘆の想いがよぎり、振り返れば、何んぞ世のため、人のため、己の家族のため、如何程の力を尽くしてきたかを自問してみるには忸怩たる想いに駆られる事を否定出来ない。

吉田兼好の徒然草の中に「されば人、死を憎まば生を愛すべし、存命の喜び日々を楽しまざらんや」という言葉があるが、云ってみれば「人は皆運命的に生かされて居り躓て星屑に帰る我が身なれば、総てのこだわりを捨て去り、もっと今現在の生を楽しもうではないか」と訓えているように思われる。

東京地区が終始会の今次大会を引き受けるに際し、些か紆余屈折があったが、漸く全員野球の精神をもって大会を推進しようという気分が漲り、手作りのパンフレットも何とか出来て、この様に盛況な大会を迎える事が出来た。東京地区の幹事諸君のご努力と、多忙中遠方より参加された各位に対し心から感謝する。今夕は暫し童心に帰りニキビ華やかなりし頃の昔話に花を咲かせ、心を天空に遊ばせてご歓談の程お願いしたい」と。次いで次期大会開催地の村松地区を代表して、伊藤淳一君（同窓会副会長）の音頭で乾杯が行われ、意気愈々揚がり漢詩を能くする遠藤順君の登場となり、再会を歓ぶ歌の吟詠が朗々として場内に響き渡った。



松城終始会、越後湯沢大会様

少年に帰る時
遠藤 順

肝胆相共に和す
臥龍新春の宴
破顔談笑
少年に帰る時
酒盈れば心尚交りなるべし
己往松城の語
友情は万金にも超ゆ
百年の温
朋に履の襪ならん
一杯又も一杯
酔別の酒未だ巡らざるに
今方に終らんとする何故ぞ
體をまかせて酔に臥よるの思
豈獨面己あらん哉
街灯雪を頂く紅顔の日
重ねて再会を約す
安ありや此の温
一人去き二人離って行く
楚々として舞の粉雪
駅頭寒風を走る

飲再会歌

遠藤 順

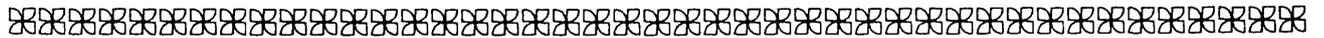
若翁未老
雙葉繁
尽臥龍
嗜前風
一・恋旧遊

其二・氣風剛健

盈々沾臆
老瘦呼春
健兒呼春
今夜蜜聲轟
九歌天

其三・臥龍醉月

山川尋到故郷
旧友歡迎終始
積年得意松城
餘月臥龍何處



腹切りの記

—入院するまで—

伊藤 勤吾 (高3回)

平成四年五月十三日、生まれて初めて健康医学センター半日人間ドックに入った。(勤め先で行なう、春、秋の定期健康診断は毎年受けていた。) 検診内容は、血液検査(生化学的検査、血清学検査、血液的検査)、尿、X線・心電図・呼吸機能・聴力・大便・腹部超音波・眼科・身長・体重・血圧検査等で約二時間かかった。

検査結果は五月二十七日に入手した。開封してみると、「胆のう壁二重、肥厚、専門医に相談せよ」とのメッセージと胆のうのエコー写真四枚が入っていた。翌二十八日午前十時頃、人間ドックの検査表をもって病院に行く。内科の先生に診察してもらう。先生はドックの結果表とエコーの写真をみながら、「念のためもう一枚エコーをとってみましょう」とおっしゃってベッドの横のエコーの機械を操作しながら突飛な声で「これは大変だ、私の手にはおえない」とおっしゃって、私を外科の先生の所につれてゆき、外科の先生と二・三言葉を交わし、あとはよろしくと言ってお帰りになった。

外科でも先生がエコーの機械を操作しながら、「伊藤さん、胆のうに直径三センチ、厚さ一・五センチのモノが出来ております。肝臓にゆ着しているかもしれません。なるべく早く開腹手術で取った方が良いです。何時入院しますか、早い方が良いですよ」との御託宣である。私はただ目の前が白くなり、頭の中は思考力なし。「まな板の鯉ですから入院の日時は先生にお任せいたします」と言うのがやっとであった。先生の「事務室で入院の手続きをとってお帰り下さい、お大事にどうぞ」の声を後に診察室を出る。事務室で入院手続きをおこなうとしても、心配と興奮のためか手が震えて字が書けない。暫く待合室のベンチで休み気を落ち着かせ、六月四日に入院する旨の手続きを済せ午後一時半頃病院の外に出る。

五月二十八日から入院する六月四日までの八日間は、一番つらく且つ一番長い日々であった。先生のおっしゃった「モノが」のモノとは何か、悪性か、良性か。私は十五年前に兄を胃癌で亡くしておる。どうしても悪い方面にモノを考える。テレビドラマ、マスコミなどで癌は死の病気のように扱っている。たしかに現在の日本人の死亡原因の第一位は癌などの悪性新生物で、第二位は心臓病であるから仕方がないが、ある本によると、癌の術後五年生存率は平均四十%、胃癌四十五%、大腸癌五十五%、肝臓癌十%、肺癌十%、乳房癌八十%、子宮癌七十%、すい臓癌、胆のう癌などの癌は成績はよくないが、徐々によくなっている。どの癌でも早い時期のものは完全な手術を受ければほぼ百%治っている。早期発見、早

期治療が大切で、無症状の早い時期に発見するために四十才を過ぎたら、年一回は人間ドック、または定期検診を受けるべきだ、進化した癌の治ゆは満足のいくものではないが、癌から治ることも、手術から回復することも患者自身の気力と体力である、治るといふ強い意志が大切だ、また治りそうもない状態では医師は手術をすすめない、と書いてあった。

それを読んでいくらか落ち着いた。開腹しないと判らないし、心配しても仕方ないし、なるようになるだけと思いつつも、頭の中は「モノ」のことばかりであった。

癌の宣告を受けた患者が、どのように病気を受け止めていくかについて考えた。入院して精密検査しないと判らないが、胆のうに「モノ」ができていて、それも大きく肝臓にゆ着しているかもしれないと知らされた時の衝撃。これは夢だ、誤診だ、頭の中を巡る悪い状況を、ひたすら追い払うばかりの—否認の段階—がまず訪れる。

病院を代わろうと思うが確定されるのが怖くて実行もできず、南山堂の医学大辞典を読みあさり素人考えて痛みも、かゆみもない、いよいよ否定できないと分かった、酒は呑んだが、真面目に生きてきた、なぜ俺だけ・・・と世の中の不公平を恨み、神も仏もないものと、うっ憤渦巻く、怒りの段階・・・手術の時はキズは小さく、輸血不用、短時間だと思う。反面、キズは大きく、輸血の量も多く、長時間かけてモノを取り、ゆ着している部分肝臓を取り、何分の一かの肝臓を残してもらえば・・・有難い、他の何を失っても延命を望む・・・取り引きの段階となる。

しかし、不安と恐れは容易にぬぐえない。安全圏といわれる五年後までは、長い道程である。

(平成五・四・三十)



T君を偲ぶ

渡辺 八郎 (高3回)

『長いトンネルを過ぎると・・・』。そして列車はなお走り行くと右手に高い山が追ってくる。霊峰八海山である。ふるさとへの行き来にはこの山を眺める。その度にT君を思い出すのである。

遠い昔の十一月の中頃だったか、一通の葉書が届いた。「元気かい。暫く東京におったが充電?のために親元へやっ来て来た。実は親父の転勤で八海山の麓に来ていた。何の変哲もない山間の集落だが、晩秋の山を眺めていると言いやない気分になる。一杯飲んで敗残の愚痴でも語ろうじゃないか。いい機会だ。来訪を期している。」ちょうど失職中でもあったので、久しぶりの便りに腰を上げることにした。

六日町の駅前に立ったのはその月も終わろうとしていた。閑散とした町並みを木枯らしが吹き通っていた。彼の出迎えを受け、オンボロの終バスで山懐の集落へ辿り着く。真正面に夕暮れに八海山が微かに頂上だけを見せて立っていた。山際のせいか横から真向かいから方向の定まらない風が雨混じりに吹く。風に合わせるように山肌を雲が乱れ飛んで行く。全容を現したかと思うと、数秒も経たないうちに雲に覆われていく。凸凹の石ころ道を枯れ葉が走り去っていく。薄暗くなった畑のそこそこに葉のない枝木が揺れている。晩秋の暮色がそこにあった。

「遠い所へよく来て下さって、何しろ山の村ですのでねエ・・・」

半ば照れているようにお袋さんが迎えてくれた。昨年からは親父さんはこの村の小学校長をしていた。子供たちは皆巣立って夫婦だけで転勤して来たのである。

山間の夕べは殊更暮れるのが早い。沢水で沸かした風呂の感触も格別だった。

薄明かりの電球が灯っている台所の真ん中に、大きな囲炉裏が切っである。その炉桁の上に塩っばい山菜料理と川魚の焼き物が出ていた。隅の方に清酒が少々、その横にどぶろくの一升瓶が数本並んでいる。

「何もありませんが内緒の酒(どぶろく)でいっぱい飲んでゆっくりしてってくださいね。」

お袋さんの言葉がとても暖かく聞こえた。親父さんも加わってきた。最初は畏まっていたが飲むほどに段々饒舌になってくる。

「若いうちだ。一年や二年道草を喰ったり、横道へ反れたりも人生の糧。まあ『至る所青山あり』だ。今宵はゆっくり飲んで語りたまえ。」

普段は堅苦しい親父さんだそうだが、なかなか話の解るりべラルな好々爺でもあった。お袋さんを交えての話は秋の夜長を満喫させてくれた。

残り火が二人だけの夜話にしてくれた。(高校時代のころ、前衛短歌の仲間に入り、近所の人達の翫躰を買ったこと。共に代用教員をしていた頃の失敗談。ほのかに抱いた同僚への想い)まで。久しぶりの時間はその日を過ぎていた。取り止めのない一酌一酌の回想も帰するところは敗残の愚痴でしかなかった。

『東京へ出て、一丁賭けてみるか。』あやふやだが結論がでた。

翌朝、雲一つない八海山を眺めながら帰路についた。心ならずも靈感のお零れを乞うてみたがどうだったろうか。(未だにうだつが上らないが)間もなくして、彼から上京した由の手紙をもらった。

かくして再びT君に出会ったのはその年の十二月も末であった。後続の私を下宿の狭い部屋に快く入れてくれたのである。あれからお互い紆余曲折を経、還暦も過ぎてなお東京にお世話になっています。ところが四年前、同期会の返事が女房殿からの電話であった。

「実は今年の七月に村松で脳溢血で倒れましてね・・・」

一瞬わが耳を疑ったのである。つい四月に逢ったばかりである。

彼が生まれたのは村松である。親父さんの職業柄、家族共々に県内を転々としていたそうである。一つの場所で暖まる時間がなく親しい友達ができなかったとか。時により『流浪の民』だと自嘲していた。そのせいか多少いじけた面もあった。「同期会なんて下らん。郷愁の茶話会みたいなもんだよ。」とあまり参加しなかった。が、二三日もすると「おい、同期会何人集まった。誰が来た。」と電話が掛かって来る。「俺は学校には何の恩恵もないし恩師もない。別段思い出もない。」とも。が、そっと母校に有名な英語事典数巻を寄贈していた。人知れずひそかに郷愁を愛していたのかもしれない。

「紋白蝶が花を渡り歩いているのを見ると小さい頃育った風景が思い出され、似たような景色のある所に住みたくなる。」と、今は亡きある老作家が書いていた。帰巢性とでも言うのだろうか。彼は姉のお墓参りの帰りに倒れたのである。村松へ向かわせたのは何だったのか。因縁めいたものを感じるのである。

それから一年、半意識のまま闘病生活が続いていた。七月見舞いに行った時は不自由ながらも会話もできた。が、九月中旬、「冥途へ旅だった」との知らせを受けた。暑い夏を耐え抜いたのに・・・、無情を感じるのである。

ともあれ終焉は、その人の物語の終わりでもある。彼なりに栄華に酔い痴れて羨望を買ったこともあった。家族に迷惑をかけたことも多々あった。が、一生懸命親孝行もしてきた。表裏合わせて等分したら、最も人間らしい彼が見えよう。悔いのない人生であった。

葬儀は兄弟家族のみのつましいものであった。活字に載るでもなく、口添えて知人に伝わるでもなく、彼の生涯は静かに終えた。知る人ぞ知るのみ。

昨年、実家へ帰る折に眺めた八海山はやたら感慨深かった。(麓の出会いは一通過点でしかなかったのである。もう彼とは濁り酒を酌み交わすこともないのだ。)と、銘酒「八海山」を飲む。



本年3月、旧中級友である五泉市安勝寺住職、故田中正紹君の一周忌法要に招かれ、級友有志と共に出席してきた。その折ご遺族より彼が生前記述した論文のコピーを頂いた。

なかなか感銘が深く、吾々に人生の生き様を教えてくれる。生活の指針として何かの参考になればと思い、ご遺族のご了承を得て紹介することとした。ご精読を乞う。

(旧中27、佐伯益一)

遺稿

人間は生かされている

浄土宗 田中正紹

「まことの仏教は、おずれの宗も生死を解脱せんため也」と沙石集に述べられてあります。十三世紀の末、無住という方によって、撰せられたものです。このことは、廿世紀の今日といえども、変わりありません。仏教とは、いつも「今」「ここにある人間」を問題としております。現代仏教という特別な仏教が、あるわけではありません。

ただ、今ここにある人間は、科学の著しい進展と、その恩恵によりまして、人間過信に陥り、人間のバランスを見失っているようで仕方ありません。廿一世紀に警告すると、地球の崩壊を危機意識で叫んでも、やはり人間の理性は、この事を解決してくれるだろうと、どこかで安易に安心しているようです。土壌を崩壊し、動物を絶滅させたなどの罪悪の反省がなされておられません。

古代インドでは、人間のことを、マヌ・マヌシヤと呼びました。考える人という意味です。同時代に仏教では、サットヴァ、執着して欲望の渦まくものとして、人間をとらえております。こうしたバランス、調和、中道、を基点にいつも置いたのです。一方に偏することが、ものを見、考える、従って行動することに誤りが生ずると、戒めております。



若年僧のあり方を、問われております。若年とは、生物的な年齢規定ではありません。修業至らず、煩惱の燃えさかるのを抑え難く、しかしその空気によって、生かされております。水、植物、動物など皆生命あるものです。その生命によって人間は生かされております。

ありがたいことです。無量寿、無量光と如来をもうけることも、こうしたものへの感謝の現れです。この大自然の生命を、人間の科学が殺害して、快適な生活を、人間が享受しておるのですから人間は罪深い存在です。

あなたは、父母を殺していますよ。そういわれた時、そんな馬鹿なという答えが返ってくると思います。父母の生命を支えたものは、衆生と称せられる、動植物の生命です。この生命を断つことと等しいのです。

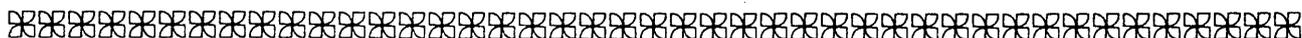
人間の至らなさを知らされ、知る程に仏を信ずる道へ進まなければなりません。手をつけど、頭を下げぬ蛙かな—そうなりたくないものです。

愛宕神社について

社格 無格社
 位置 宇愛宕山
 祭神 伊弉諾尊・火産靈尊・伊弉册尊
 由緒 創立年代詳ならざれども神体は、弘任5年弘法大師一本を以て三体を彫刻せし内の一体なる旨石碑に傳ふ、従前愛宕山の絶頂に鎮座の處、正保二年領主堀氏の命に依り山腹に移せしが、明暦二年雷山に罹り萬治元年再建す。寛文九年檢地の節東西九拾間、南北百拾間を社地と定められ同十二年より年々祭典料を寄付せられ其後天保九年より社領米年々貳石及大祭の節釜薪並に護摩木として松木三柵づつ附與の處、明治四年廃絶す。境内神社次の如し…稲荷社…祭神・倉稲魂命 寛政元年

建物 社殿は、間口四間半（中央一間半の入口）奥行五間半、茅葺き（鉄板で覆っている）妻入り。
 内部は入口左右に小屋を設けてあるが、入口から二間半に内陣と外陣の区切りがあり彫りを施した大きな梁が通っている。
 社殿の後方中央に、社殿が小さく掛け出しているが柱のほぞ穴のあと、板をはめた縦溝のあとがあってもう少し大きいものであったことがわかる。更に特徴として屋根の檼が、棟から放射状に葺きおろす扇檼の様式になっている。

資料提供 伊藤 正氏（中32、村松在住）



亀嶋さんの出版を祝う会に出席して

武藤 三郎（旧中26回）

赤山会々長の亀嶋さんが三冊目の随筆「三井銀行を築いた異色の経営者たち」と言う本を出版され、そのお披露目とお祝いの会が昨年12月1日（土）午後5時から九段下にあるホテル・グランドパレス「白樺の間」で開催された。当日些か緊張気味で受付を済ませた私であったが、亀嶋さんからお声を掛けて頂き、慌ててごちないご挨拶をしたことで幾らか落ち着きを取り戻した。

亀嶋さんは早稲田を卒業後、銀行業界の名門、三井銀行に入行され30有余年にわたり勤務、その間俊才を発揮して大規模店の支店長に就かれるなどの要職を歴任された。定年退職後は銀行の子会社、ホーライ（株）の役員に迎えられたが、5年後には母校早稲田大学総長から、たつての要請を受けて7年間総長室に勤務され、飛躍を続けている早稲田の発展に大きな貢献をされたなど輝かしいご経歴の持ち主である。現在も早稲田大学の評議員で、亀嶋家の原籍地である愛知県（旧三河）の育英学会（財団法人）三河郷友会理事長として活躍しておられることから、今回の慶事に駆けつけられた方々は社会的にも名声の高い錚々たる人達が多数出席されていた。

祝う会は坂本進氏（旧三井銀行OB元パリ支店長）の司会で進められ祝詞では金子靖氏（元三井銀行副社長）村井資長氏（元早稲田大学総長・工学博士・元子爵）、乾杯の音頭を岩永大八氏（三井銀行OB）、引き続いて祝詞を清水司氏（元早稲田大学総長・工学博士・現東京家政大学学長）の方々から、いろいろな思い出を織り込みながら、異口同音の高い評価の言葉が贈られていた。

また、たくさんの祝電の披露のなかには、早大春秋会会長・竹下登氏（元首相）、さくら銀行名誉会長・小山五郎氏、現さくら銀行会長・末松謙一氏からも届いていた。今回の著書には、亀嶋さんに縁りの深い6名の方々が「発刊によせて」を寄稿しておられるが、何れもこの作品を絶賛しておられ、その滑らかで達意の文章の底には、生来の暖かい人間味が豊かに息衝いているとの一節があった。まさに最適な表現ではないかと思う。



亀嶋さんはこれまでに「日々去来」「続日々去来」と題する随筆集を既に出版しておられるが、三冊目の今回の作品は、8人の経営者の列伝として三井銀行120周年史の別冊に加えられても不思議ではない内容ではなからうかと思われる。

祝宴も2時間程過ぎた頃、亀嶋さんから謝辞が述べられたが、丁重で謙虚な人柄が言葉の一言一句に滲んでいたので強く印象に残った。この日の掉尾を飾って可愛いお孫さんから花束贈呈の場面が演出されたが、満面笑みを浮かべて受け取られた時には会場から一斉に拍手が沸きあがった。そんなシーンをカメラに収めたいと慌てながらシャッターを押したが案の定出来な絵になり汗顔の至りである。

尚、赤山会、同窓会からは佐久間精一、高橋忠夫、奈良泰夫の皆さんと私がお祝いに参上したことを申し添えて報告とします。



鹿瀬は元気

深見 洋子（高7回） 常任幹事

2月某日、寒い日だったが浅草まで出向く。奥阿賀かのせフォトコンテスト入選作品による写真展が開かれていると、佐伯支部長から情報を得たので、会報に掲載しようと思い、沢出・鶴巻両氏と雷門前で待ち合わせた。

会場は台東区の施設・隅田公園リバーサイドギャラリー、隅田川沿いに細長く建っていた。かなり奥行きがあるので、展示にご苦勞があった事と察しつつも広過ぎる程なので作品が少なく感じられた。

写真は、見慣れた阿賀野川周辺の風景が懐かしさを呼び起こしたが、私はむしろ当地の特産工芸品として展示されていた「手漉き和紙」の照明オブジェの方に目を奪われた。それは継ぎ目や、木、竹等による枠組みなく立体的に形作ってゆく方法で作られ、不思議なムードを持っていた。明りを灯すと、手作りによる表面の不揃いさが浮き出して味となり、ふと幼い頃育てた蚕の繭を思い出した。

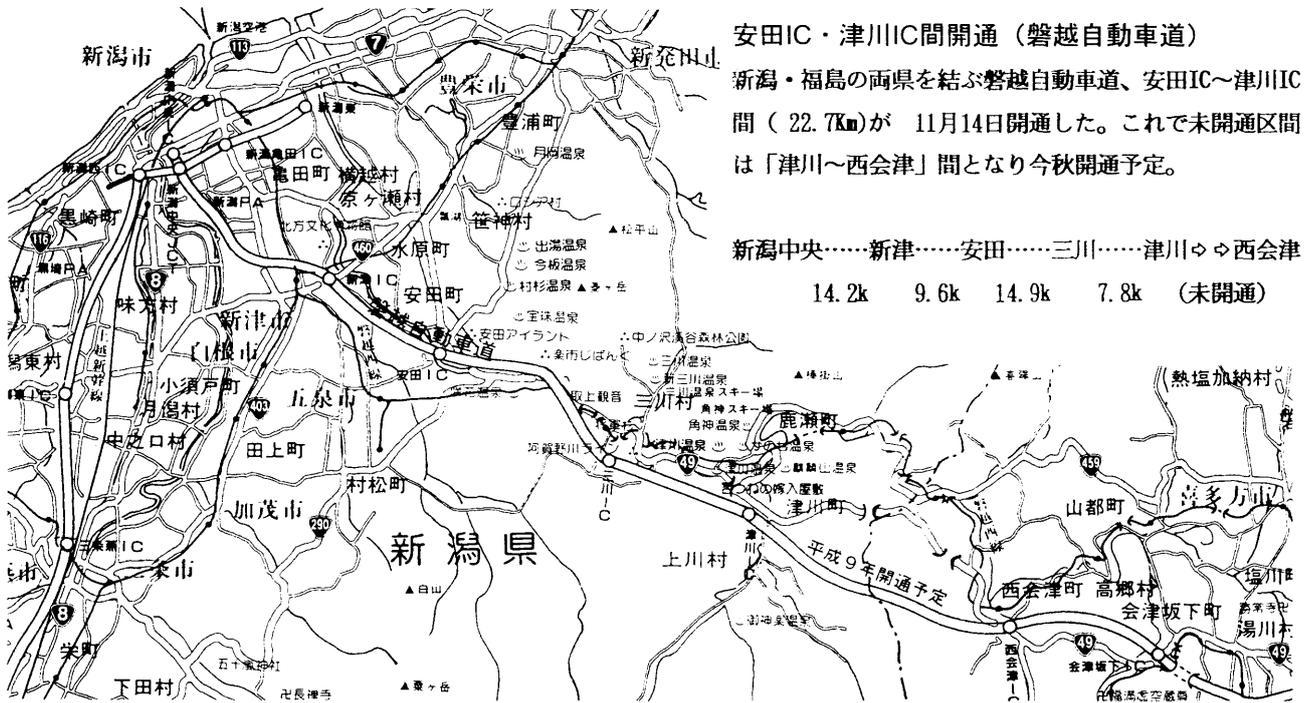
会場入口前の広場では、テントの下で地元から来た青年達が「こしひかり」や「山菜」など鹿瀬の特産品を売っていた。私は彼等に「かのせの元気」と人柄の良さを感じると同時に、あの鹿瀬からどの様ないきさ



つで、東京でこんな催しをするという発想が出たのを知る由もないが、とにかく素晴らしい事だと思った。

4月の某日、用あって桜は未だ五分咲きの村松へ行き、キリン山温泉「福泉」で一泊した。津川の桜はまだ蕾も固く、改めて気温の違いを思い知らされた。

翌日、鹿瀬まで足をのぼし、ダムのすぐ傍にある赤と白の意表をつく建物「ふるさと館」を訪ねた。白い方が「和紙ボックス」、そこで、あの繭のような照明オブジェに再会する。やはり何ともいえない美しさと不思議さで私たちを魅了してしまった。そこでは体験制作も出来るとの事なので「近いうちに是非作りに行きたいもの」と思いつつ鹿瀬の町を後にした。



安田IC・津川IC間開通（磐越自動車道）
新潟・福島を結ぶ磐越自動車道、安田IC～津川IC間（22.7km）が11月14日開通した。これで未開通区間は「津川～西会津」間となり今秋開通予定。

新潟中央……新潟……安田……三川……津川⇄西会津
14.2k 9.6k 14.9k 7.8k (未開通)

戦没少年通信兵の碑を読んで

八木 又一郎 (高7回)

先新春号に佐伯支部長から寄せられた「戦没少年通信兵の碑」を読み、なるほどそうだったのかと、靡気ながら分かった気がした。

私は敗戦の年は菅名村の木越国民学校3年生だった。その頃のことを鮮明に覚えている。後の木越小学校の校庭の五泉寄りのところで、よく演習をやっていた。それを見るのが楽しみだった。でも、かわいそうな場面もあった。両側にハンドルがついた発電機を二人で回して発電するのであるが、疲れてきて回転が遅くなると電圧が低くなり、ツー・ト・トが届かなくなる。そんな時は上官らしい人がとんで行きピンタがとぶのである。

なんでも東京と交信しているのだと、その時ちらっと聞いたことがある。本当だとしたら陸軍中野学校ということになる。

昭和19年頃 日曜日になると、少年兵が数人連れ立って我が家に遊びにきていた。昼食を食べるのが楽しみだったらしい。そんな関係があつてか、第一中隊長の田淵武大尉が下宿されることになって、敗戦処理が終わるまでおられた。

まだ日本が負けなかったころは、朝食が終わって、軍服に着替えられたころ、当時馬丁とよんでいたと思うが、その方が大きな声で「隊長殿をお迎えにまいりました」玄関に向かっていう。田淵大尉はおもむろに大尉専用の上玄関で靴を履き、馬の手綱をとると、ひらりと馬に乗り「ごくろう」の一言をいい馬の背に姿勢正しく兵舎に向かわれるのであった。また、夕方になると、「隊長殿のお帰りです」の声があり、しばらくすると、馬のひず

めの音が聞こえ、お帰りになるのである。ここでもひらりと馬から降り、手綱を投げるように渡し「ごくろう」である。

そのころ大尉は陸士出で23・4歳であったか、とにかく格好よく、「おれも、絶対陸士に入るぞ」と思ったものである。

少年通信兵学校は、8月15日の夜から国民学校に分宿することになっていて、何日か前から分宿の準備が始まっていた。学校の裏庭に桑原中尉の指揮で大きな竈を土で作っていた時、上官らしい人が来て、桑原中尉に、「15日には出来上がるか」と聞いた。すると桑原中尉は、背筋を伸ばし「出来ません」はっきり答えるではないか。また上官が何かいったようだが、「出来ません」と聞こえて来た。しばらくして「はい」。

陸軍ではなんでも「はい」なのかと思っていたが、出来ないものは出来ないというんだと、変に感心した記憶がある。

さて、その8月15日敗戦の日、午前中に町に使いにやらされ、若宮のあたりで少年兵の長い列に出会った。机や椅子、通信機、機械類などをみんなで持ち、軍歌を大きな声で歌いながら行進してきた。今晚から学校に泊まるのである。

お昼の玉音放送、なんにも分からなかったが、日本は負けたという。

午前中に運び込んだ品物を、午後は兵舎に戻す作業が始まった。少年兵たちは、号泣につぐ号泣、泣き叫びながら兵舎との往復をしていた。その木越小学校もなくなってしまった。

佐伯支部長の一文から、とりとめもなく思い出すまま記してしまった。お許し頂きたい。

訃報

加藤 豊氏 (旧中29回)
平成9年3月9日 逝去されました。

木村 時也氏 (高4回)
平成9年3月16日 逝去されました。

謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。

開通一秋田新幹線

秋田新幹線開業 (こまち号)

盛岡・秋田間 127 km を田沢湖線・奥羽線の線路を新幹線用の幅に取換え 3月22日開業した。東京・秋田間を 3時間49分で走り一日上下32本運行。盛岡・秋田間の最高時速 130 km。初日の全指定席は発売開始から 6分30秒で売り切れ、中でも一番列車分は 5秒で完売した。

盛岡……雫石……田沢湖……角館……大曲……秋田
16.0k 24.1k 18.7k 16.8k 51.7k



やっとこさ

ほくほく開通

おらが春

ほくほく線（北越急行）開業

上越線六日町と信越線犀潟を結ぶ（59.5km）北越急行ほくほく線が3月22日開業した。首都圏から北陸への所要時間は約15分短縮された。上越線越後湯沢から一日の運行は、特急「はくたか」金沢行9本、各停・直江津行9本。越後湯沢発の他に、六日町始発の各停・直江津行7本が走行している。この開業により陸の孤島感のあった、東頸城地区（十日町、松代など）が交通至便となり首都圏の主な駅から、2～3時間で行くことが出来、また首都圏からの観光客誘致のため観光施設の見直しや新しく建設するなど地元では活気に満ちている。

「ほくほく線」のあゆみ（松之山町役場広報より）

昭和 6年	東頸城郡松代町で鉄道建設運動が始まる
37年	鉄道敷設法による予定路線に編入
43年	六日町～十日町間の工事着手
48年	十日町～犀潟間の工事着手
55年	国鉄再建法施行に伴い建設予算凍結で、工事中止
59年	第三セクター・北越急行（株）設立
60年	日本鉄道建設公団が工事再開
平成元年	高速列車を運転させることが決定
4年	鍋立山トンネル先進導坑貫通
7年	鍋立山トンネル掘削完了
8年	レール締結式（4月） 試験走行開始（9月）
9年	3月22日・全線開業

編集後記

- ◇村松高校同窓会東京支部大会も本年度で第40回大会となり、盛会となってきている。先輩の皆さんの労苦に感謝。
- ◇今年には戦後の学制が施行されて50年、新制高校となって50年経ったのである。旧中、旧高女の皆さん同様、高校卒の方々も全国の各界でご活躍のことと思う。
- ◇この50年間に村松高校を卒業された諸兄は、東京をはじめ関東一円に多く住んでおられる。ぜひ、同窓会東京支部大会にご出席いただきたいと編集子は思うのである。
- ◇はじめて東京に出てきた時、いかにして「村松訛り」を隠そうかと、変に気を使ったものである。それが今、年齢をとったからだとは言うかもしれないが、妙に温かく懐かしく思われる。
- ◇同窓会には、その訛りが飛び交うのである。なんとも嬉しく、楽しい年一回の時間を持つ機会なのだ。

- ◇言葉のことで思い出したが、ラジオから始まってテレビの普及で、方言が年々無くなってしまっている。まことに惜しい気持ちである。
- ◇お年寄りの話す言葉を聞き取って残しておきたいと思ったことも再三だったが、それも出来ずに今にいたっている。
- ◇もっとも、もう誰かがやっておられるのではないかとも思うが、もしそういう著書等があったらぜひ教えていただきたいと願っている。
- ◇「去年の同窓会は、ひんでおもしえがったがねん ことは一緒いごてば」
「あいや、そゆがんだ、おらもつれてってくなせや」
「そいえば、おめえしゃんと、ながいがったあの人、一緒いがねかねえ」
「いうでみるわねん」
- ◇こんな会話を期待して、編集後記をおわせてもらう。今年は暑くなるのか、涼しい夏か気になるところだが、皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げる次第である。

平成9年 6月 第23号

発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部 広報部

事務局：〒113 東京都文京区湯島2-30-9 (有)ツルマキ 内

TEL 03-3818-6448 FAX 03-3818-6270

郵便振替 00160-9-26339